

校長室より

第59号

「天空高き」



平成26年5月1日

集団訓練—お互いに心を開いて—

オリエンテーションが終わり、仕上げである、集団訓練がありました。

学校は、集団で学ぶ場です。これから、授業をはじめとして、運動会や全校朝礼、防災訓練、修学旅行などで、集団としての規律ある行動が求められます。

集団生活を送るときに一番大切なことは一体何でしょうか。

必要な社会的スキル（技能）を身につけることで、円滑な対人関係をつくりあげることです。

社会的スキル（技能）とは、皆さん一人ひとりが、自分の役割を責任持って果たそうとする意識を高め、時間を守る習慣を身につけ、集団の一員としての行動する力です。

2001年9月11日のアメリカ同時多発テロによるWTC（ワールドトレードセンター）ビルの倒壊の時に、避難した人たちはパニックにならず整然と、何十階もの階段を降りたというのを何かのニュースで聞きました。

避難しようとする集団の中の一人として、自分はどのような行動をとればよいのか、冷静に判断できる人が多かったのだらうと思います。部下を先に避難させた人、弱い人を助けながら避難した人もいたようです。

私たちもまた、チームワーク（団体行動）によって、一人ひとりの能力と規範意識をより高めていきましょう。



真剣に話すとか、真剣に聴く、というのは疲れるけれど、気持ちがいい！

ちょっとためになるお話—端午の節句—

さわやかな風が校長室を駆け抜けていきます。一年で一番緑の美しい季節になりました。この季節の野山には一体何色の緑があるのか、是非野山を駆け巡って探してください。

ところで、5月5日はこどもの日です。この日はもともと五節句の端午の節句にあたります。

節句とは、伝統的な年中行事を行う季節の節目となる日で、ほかには、人日（じんじつ）1月1日、上巳（じょうし）3月3日、七夕（たなばた）7月7日、重陽（ちょうよう）9月9日があり、その日の祝儀料理を節句料理と言っていました。今は、人日の節句料理のみが、「おせち」として残っています。

端午とは、5月端（はじめ）の午（うま）の日のこと。鎌倉時代のころから、「菖蒲」が「尚武」と同じ読みであることで、家の疵（ひさし）に菖蒲と邪気払いの「蓬（よもぎ）」を飾っていました。この日には、粽（ちまき）や柏餅を食べたり、菖蒲を浮かべた風呂に入ったりする風習もあります。柏は、新芽が出るまで古い葉が落ちないので、「家系が絶えない」縁起物として柏餅が広がりました。5月人形を飾り、庭に「こいのぼり」を立てるのが典型的な端午の節句の祝い方です。



廊下を走らない！—自分の行動にブレーキをかける—

「廊下を走らない！」と、小学校から言われてきたと思います。私もよく注意されました。

この決まりは、「走る」という行為そのものを禁止している訳ではありません。廊下という場所を限定して、走ることを禁止したものです。当然、狭い廊下を走ると、誰かとぶつかってしまい大きな怪我につながるからです。

そして、もう一つ、大きなねらいが、この決まりには秘められています。それは、「自分の行動にブレーキをかけ、他の人のことも考えることのできる人間を育てる」ということです。

春の交通県民運動は終わりましたが、毎年スピードの出し過ぎで多くの貴重な命が交通事故で失われています。自分の行動に、自分の心にブレーキをかけることができれば、大きな事故や災難に出会うことはありません。

毎日の小さな決まりを守ることで、自分の行動にブレーキをかけることができ、それが自分の命を守ることに繋がります。



母の日ープレゼントの精神ー



今年は5月11日が母の日です。フランスでは5月の最終日曜日、ロシアでは11月の最終日曜日と、世界では母の日の起源もさまざまです。

アメリカの起源は、1907年アメリカヴァージニア州・ウェブスターに住んでいたアンナ・ジャービスさんが、苦勞の末に自分を育ててくれた母の死を悼み、母親が好きだった白いカーネーションを教会に配ったのが発端とされています。

日本で初めての母の日を祝う行事が行われたのは明治の末期頃で、1915年（大正4年）に教会で祝われ始め、徐々に一般に広まっていったと伝えられています。

昭和に入ると3月6日を母の日としていました。この日は当時の皇后の誕生日であったそうです。現在のようになったのは、戦後しばらくしてからだと言われています。

ところで、皆さんは、大切な人にプレゼントをするときには、どうしますか。

例えば母の日にプレゼントするとき、私たちはまず母のことを考え、母の好み、母の興味関心に合わせて、プレゼントを用意します。それに、「お母さんが元気でいてくれると、私も元気になります」等と書いたカードを添え、タイミングを考えて手渡します。これがプレゼントの精神だと思います。

プレゼントの精神は、相手の気持ちになって、相手の興味関心に添って、十分な準備をして、タイミング良く手渡すことだと思います。

皆さんは母の日に、大切な人に何をプレゼントしますか。

「致知」2012年12月号で紹介された、助産婦：内田美智子さんのお話です。

自分の目の前に子どもがいるという状況を当たり前だと思わないでほしいんです。

自分が子どもを授かったこと、子どもが「ママ、大好き」と言ってまとわりついてくることは、奇跡と奇跡が重なり合ってそこに存在するのだと知ってほしいと思うんですね。

そのことを知らせるために、私は死産をした一人のお母さんの話をするんです。

そのお母さんは、出産予定日の前日に胎動がないというので来院されました。急いでエコーで調べたら、すでに赤ちゃんの心臓は止まっていました。胎内で亡くなった赤ちゃんは異物に変わります。

早く出さないとお母さんの体に異常が起こってきます。でも、産んでもなんの喜びもない赤ちゃんを産むのは大変なことなんです。

普段なら私たち助産師は、陣痛が5時間でも10時間でも、ずっと付き合ってお母

さんの腰をさすって「頑張りい。元気な赤ちゃんに会えるから頑張りい」と励ましますが、死産をするお母さんにはかける言葉がありません。

赤ちゃんが元気に生まれてきた時の分娩室は賑やかですが、死産のときは本当に静かです。

しーんとした中に、お母さんの泣く声だけが響くんですよ。

そのお母さんは分娩室で胸に抱いた後、「一晩抱っこして寝ていいですか」と言いました。

明日にはお葬式をしないといけない。せめて今晚一晩だけでも抱っこしていたいというのです。

私たちは「いいですよ」と言って、赤ちゃんにきれいな服を着せて、お母さんの部屋に連れていきました。

その日の夜、看護師が様子を見に行くと、お母さんは月明かりに照らされてベッドの上に座り、子どもを抱いていました。

「大丈夫ですか」と声をかけると、「いまね、この子におっぱいあげていたんですよ」と答えました。

よく見ると、お母さんはじわっと零（こぼ）れてくるお乳を指で掬（すく）って、赤ちゃんの口元まで運んでいたのです。

死産であっても、胎盤が外れた瞬間にホルモンの働きでお乳が出始めます。死産したお母さんの場合、お乳が張らないような薬を飲ませて止めますが、すぐには止まりません。

そのお母さんも、赤ちゃんを抱いていたらじわっとお乳が滲（にじ）んできたので、それを飲ませようとしていたのです。

飲ませてあげたかったのでしょうかね。

死産の子であっても、お母さんにとって子どもは宝物なんです。生きている子ならなおさらです。

一晩中泣きやまなかつたりすると「ああ、うるさいな」と思うかもしれませんが、それこそ母親にとって最高に幸せなことなんですよ。

母親学級でこういう話をすると、涙を流すお母さんがたくさんいます。でも、その涙は浄化の涙で、自分に授かった命を慈（いつく）しもうという気持ちに変わります。

「そんな辛い思いをしながら子どもを産む人がいるのなら私も頑張ろう」

「お乳を飲ませるのは幸せなことなんだな」

と前向きになって、母性のスイッチが入るんですね。

いま、ここにある命のありがたさに感謝しながら、「母の日」に「お母さん、ありがとう」と感謝を伝えたいですね。